大坪流・馬術指南役　関谷直右衛門

山本　保
（会員・佐伯市池船町）

昨年十二月二十八日、宮崎市船塚町一丁目、関谷医院院長の関谷進さん（九代・六十三歳）は、親交のある直川村直見の薬局業高須賀芳包さん（七十一歳）と一緒に「我が家に伝わる旧佐伯藩資料を佐伯市に贈ります」と、佐伯市役所を訪れた。

関谷さんは、戦後、東京都から佐伯市に移住し、内科医師として健康保険南海病院に勤務したほか、直川村で医院を開業したこともある。その後、宮崎市に転居、資料は父親の直弥さん（八代）＝二十五年死去＝が大切にしていたもので、父の遺品として、これまで保存してきた家宝の馬具や古文書など、合計六十点を佐々木博生佐伯市長に手渡されたが、柴田義夫教育長・菅淳一社会教育課長、そして山田二三男社会教育係長も同席した。

寄贈品目録は左の通り

三代目関谷直右衛門関係資料（二十五件）

一　大坪本流師匠千田喜惣治季賢から、直右衛門宛姓名を記載した伝受品

①　巻物

(イ)　免　状

(ロ)　大坪本流系図

(ハ)　大坪本流常馭事法目録

(ニ)　三国秘伝書

(ホ)　御当家流　巻十八

(ヘ)　鞭扱い

(ト)　段之馬積之次第

②　和綴書

(イ)　故実秘伝書

(ロ) 大坪本流若葉之巻
(ハ) 大坪流乗方之和歌
(ニ) 大坪古流百弐拾ケ条講釈之巻
(ホ) 大坪本流庭乗之書

③ その他一件

二 参考文献等

① 和綴書

(イ) 大坪本流十字録
(ロ) 同　常馭法目録
(ハ) 同　免引之巻
(ニ) 同　繰糸之巻
(ホ) 同　黄昏之巻
(ヘ) 同　飛鳥之巻
(ト) 同　対馬問答　坤
(チ) 大坪流桐坪之巻
(リ) 善御譜席
(ヌ) 雲霞集　上巻
(ル) 同　中巻

② 絵図の巻物

六代目関谷長恭（長守・大五郎）関係資料（三十五件）

① 掛軸　玉置平兵衛政利像
② 馬鞍（佐伯藩主毛利家家紋・矢筈の紋章入り）
③ 本人記載による物件
(イ) 大坪流手綱目録
(ロ) 大坪流軍馬
(ハ) 大坪流軍馬手綱目録
(ニ) 調息聞書
④ 印刷物
⑤ 大坪流師匠玉置平兵衛政利からの伝授品　巻　物
(イ) 序目録
(ロ) 鞍鐙系図
(ハ) 紐のないもの
(ニ) 中目録
(ホ) 系図

大坪流師匠玉置平兵衛政利からの伝授品　和綴書

(イ) 雲龍巻（上・中・下）
(ロ) 手綱目録・手綱秘伝書
(ハ) 中目録
(ニ) 馬口之書・乗方秘伝
(ホ) 家伝書手綱目録　一―三迄

(ヘ) 同　四ー六迄
(ト) 百曲之書　他三編
(チ) 七ケ条心持秘伝書
(リ) 序目録
(ヌ) 調息秘伝書
(ル) 鞍鐙伝来
(ヲ) 御伝別覚集
(ワ) 雲霞集（上・中・下）
(カ) 幸秀論（上・中・下）
(ヨ) 秘伝・余伝手綱目録（上・中・下）
(タ) 調息序並伝　他十項目

⑥ 作製者・作製年月日不詳の物件
(イ) 大坪流系図・花押（和綴書）
(ロ) 家伝歯図（和綴書）
(ハ) 馬の骨格図
(ニ) その他四件

文化・文政のころ（一八〇四ー一八二九）、佐伯藩士関谷直右衛門長久（五代目）は、馬術の名人として知られていた。

江戸に勤務中（参勤交代のため）、幕府に元気のよい馬がいて、誰一人としてその馬に乗ることができなかった。そこで幕府の役人は、長久の名声を聞き、あばれ馬の訓練を依頼した。長久は驕馬に乗り、行くままにまかせると、疾風の如く走り往くこと三里、ついに池上本門寺の前に止まった。おりて水を与え、再び乗っておもむろに帰ってきた。

その調教ぶりを聞いた十一代将軍徳川家斉は、彼をほめたたえて賞を授与した。

江戸・愛宕山東の男坂石段を上った曲垣平九郎の馬術は、天下に有名だが、関谷直右衛門の力量も、これにまさるともおとらないものであったことが、うかがわれる。

当時、佐伯領内で、久保泊浦（現在・津久見市）の力士・小町川、落野浦（津久見市）の浄瑠璃師・歳太夫、そして馬術の長久を佐伯の三名人と称賛していた。

なお、大坪流とは、室町幕府時代大坪道禅が創始した馬術の一派である。道禅は上総の国の生まれで、将軍足利義満（四代）、足利義持（五代）の二代に仕えた馬術の師匠であった。

その馬術の方式については口伝の秘法とされていたので、完全な馬術書が残存していない。しかし、近代の洋

式馬術と比較してみると、根本原則は同一であるといわれているし、大坪流の元祖で古今独歩と称せられた大坪道禅の乗馬の図は、現代馬術そのままである。

関谷さんが寄贈された大坪流の古文書は、全国的にも珍しい、貴重な資料といっても過言ではない。

佐伯市城下東町にある佐伯鶴城高校前の堤防には、次のような石碑が建立された。

馬場之松復元碑

馬場の松は、毛利高慶侯（六代佐伯藩主）が享保四年（一七一九）に築きし防潮堤上の松並木なり。

佐伯中学此処桜馬場跡に建ちてより、老松の雄姿は母校の象徴として、万余の同窓の魂のよすがたりしが、二十余年前、あたら虫害の悲運に遭えり。よってここに母校創立七十五周年を記念して、之が復元を成す。

提唱者は小野史郎君（佐伯・緑の会会長）なり。

修景栽植の資は、大方の同窓生と在校生の父母とが、挙りて寄せし浄財を充つ。

堤の改修は佐伯市が担う。

新生馬場の松は、高幹十一本を阿蘇山麓に購い、低幹十本は、三浦早志氏（弥生町久土・元昭和中学校長）が寄贈、ともに二十年生の黒松なり。

希くは、後輩諸君が之を愛育して、千載の寿を保たしめんことを。

昭和六十年九月吉日

碑文　同　窓　会　長　浜　崎　義　雄

揮毫　佐伯鶴城八代校長　狩　生　熊　義

佐伯鶴城高校　校歌の三節より

かかる自然に育（はぐく）まれ
かかる史蹟に鑑（かんが）みる
健児の前途（ゆくて）君見ずや
城山の松　馬場の松
風にうそぶき　雲を呼ぶ
雄々（おお）しき姿　これぞこれ

その昔、この馬場は、佐伯藩の若い侍たちが、白鉢巻かいがいしく、馬術（大坪流）の稽古に余念のなかった所である。あの松の木に、そのころ幾度となく、勇ましい武士たちの馬の手綱（たづな）が、つながれたことだ

ろう。

馬場の並木の松籟を聞くとき、それは当時の有様を物語っているかのようで、うたた今昔の感に堪えない。

文武両道を目差した馬術指南役・関谷直右衛門先生の感懐は、いかなるものであろうか。

表紙解説

深島にある役行者碑

本名は役小角（えんのおづの）。奈良時代（七―八世紀）大和国葛城山にいた呪術者。世を惑わす妖言を吐いたとの理由で讒（ざん）せられ、伊豆に遠流された。

彼は山岳信仰を楯にしたシャマン風なものであったが、後世、密教が山岳信仰界に浸潤してくるに及んで、彼を理想的祖師と仰ぐ傾向が強まっていった。その呪術のすぐれていたことを讃え、伊豆を中心に各地の山頂から山頂へと飛びかける、たくましい一本足駄履きの姿を理想像に描くようになった。

密教は山間幽邃神秘の雰囲気のなかを登って苦行し、その修錬の結果を力にして呪験力を高めようとする験者を生んでいったが、彼らの間に役小角祖師観が育っていった。そして役行者という言葉が、彼を呼ぶ語として平安期以来熟していった。

とくに大和の金峰山は、貴顕あるいは験者の山岳登拝修行場とされ、さらに大峰山から熊野山にかけて彼らの中心的な道場が開かれるに及んで、役行者はこれらの山山と関係をもった人物であるかのように伝説化した。

ついに各地の霊山には、どこでも役行者開創を伝える話ができるに至った。そして験者の系統である山伏の開祖とされ、修験道（しゅげんどう）界第一の先達と仰がれてきている。

この碑は深島に山岳信仰があったあかしである。

（河出書房版　日本歴史大辞典より）塩月